

# かささぎ通信 第143号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2025年 1月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2024年12月の「森三郎の作品を読む会」では、「鼓大名」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943年12月)、「ステッキえんぴつ」(『赤い鳥』1933年10月号)を読みました。

「鼓大名」は『森三郎童話選集 かささぎ物語』(1995) 収録作品です。2018年3月に取り上げたので、内容については「かささぎ通信」第67号に詳しく載せました。鼓の上手な大名が、何か珍しい獣の皮で鼓を張り替えようと、奥方に相談します。奥方は「嘘の皮なんかではいかがですか?」と答えます。もちろん、奥方は冗談を言って亭主の大名をからかったのでしょうか。でも大名は聞いたこともない「嘘の皮」を探しに出かけ、一人の若者から「嘘の皮は世界中の女が一枚ずつ持っている」と教わります。若者の話によると、嘘の皮に包まれると亭主は女房にすっかり騙されてしまいます。その例として日本の話、唐の話が一つずつ語られます。日本の話は、物を食わないお嫁さんだと思っていたのに、実は女が髪をとくと頭の真ん中に大きな口が開いていて、そこへ次から次へと牡丹餅を放り込んでいたという話で、民話の「食わず女房」そのままです。唐の話は、おとなしい女房が夜になると馬を走らせ、山奥で怪しい女たちと酒盛りをして、朝になる前に家に戻っていた、厩の馬が体いっぱい汗をかき、あえいでいるのを不思議に思ったその家の主が女房の後を追ひ、真相を知るといいます。ものです。「かささぎ通信」第67号で、これは唐の時代の『宣室志』にある話を元にしただろうと紹介しました。

「読む会」では現在『雪こんこんお寺の柿の木』の作品を初めから通して読んでいますが、森三郎は古典をヒントにそれぞれの話を創作していることが分かってきました。前回読んだ「ひぐらしの村」の場合はドイツの「ハーメルンの笛吹き」がヒントになっていると「かささぎ通信」142号で報告しました。

さて「鼓大名」の結びは「嘘の皮がおとれになりました?」と奥方が笑いながら聞くと、大名が「やい、嘘の皮をここへ出して見ろ」と

言うので逃げる女房を「やるまいぞ、やるまいぞ」と大名がどこまでも追いかけるという狂言仕立てで終わっています。狂言と言えば、大名狂言として有名な「靱猿(うづぼざる)」が、「鼓大名」の構成のそもそものヒントであったと思われる。「靱猿」では大名が猿曳き(猿回し)の猿を見て、靱(矢を入れて背負う筒)に猿の皮を張りたいたいから、二年貸せと無体なことを言います。猿曳きが断ると弓矢で脅され、仕方なく猿が苦しまないように自ら猿を打とうと棒を振ると、猿は合図と勘違いして芸を始めます。あまりのいじらしさに大名は猿の命を許し、猿のめでたい舞で舞台は終わります。「鼓大名」も鼓に張る獣の皮を探すがきつかけとなり、跡取りの無かった大名が物知りの若者を養子に迎え入れ福を得るめでたい話になっています。

『赤い鳥』一九三三年十月号掲載の「ステッキえんぴつ」は小学生の兄弟の話です。親戚のおばさんからお土産にもらったのが、兄は雑誌、弟はステッキえんぴつでした。「かささぎ通信」37号で紹介したように一九一五年にステッキを付けた鉛筆がトンボ鉛筆から発売され、その後もチャップリンの映画の人氣と共に一大ブームを起こしたそうです(参考「トンボのキセキ」。三郎さん(一九一一年生まれ)の子どもの頃にも人氣があつた商品なのでしょう。この作品の掲載一年前の一九三二年にチャップリンが初来日していますから、思い出の鉛筆を話題に取り上げたのかもしれない。弟が兄の雑誌を見たがるので代わりにステッキえんぴつを借りた兄がそれを学校でなくしてしまいました。探しても探しても見つからなかった鉛筆が後日掃除の時に教壇の下から出てくる場面は、「フィルム」(一九三三年五月号所収)にも同様の描写がありました。一九三三年当時の作品では日常の生活の細部や子どもの心理をリアルに描いている作品が多いと実感します。

〈次回予定〉2025年2月14日(金) 午後一時半~三時半

「竹馬与市」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)

「茂作」(『赤い鳥』1933.12)